

## (ヒ) サカキ生産～定年後の多角的里山利用

### 1. 植物の特徴

(ヒ)サカキは本州、四国、九州、沖縄に分布している常緑樹で、非常に数が多く照葉樹林ではどこの森にも生えている。低木層にでるが、直射光にも強く、伐採時などにもよく残る。普通は樹高が 4～7m 程度になる。葉はやや倒卵状楕円形で、丸い鋸歯がある。葉は厚みがある革質で、表面はつやが強い。葉の先端は、ほんの少しくぼみがあることが多い。枝は横向きに出て、葉が左右交互にでて、平面を作る傾向がある。

### 2. かつての活用

現在でも神棚、墓、仏壇などに供えられる木で、本サカキが関東以北には分布していないためにその代替として使われていることと、本サカキは神事にしか用いられず墓や仏壇には供えられないのに対してヒサカキは両者に用いられることから活用は広い。

しかし、後述するようにヒサカキの生産となると自然のものを利用する場合手間がかかるため経費高となり、現在出回っているお供え用のヒサカキは輸入物が多い。

### 3. 荒廃の現状

本事例は石川県能登半島の里山利用のヒサカキを取りあげているが、もともと本事例の里山はマツタケの採れたアカマツ山(天然のアカマツと広葉樹の混ざった林)で、利用の収入的な柱はマツタケであった。しかし、「何もしいなくても採れた」記憶がある中、マツ枯れと相前後するような流れで次第しだいにマツタケが採れなくなってしまっていた。

そもそも、それ以前に薪炭としての利用も 1970 年代には急速に減り一燃料革命自体は 1960 年代に始まるが、本事例は町から離れた山で薪炭の利用はそれよりも長く続いていた一ちょうど子育て時期でもあったために諸費用が必要だったので、その期間は山に出かける機会は少なく半年は出稼ぎ、残りの半年も地元での稼ぎ仕事に忙しく「山のそうじせんならんね」と思いながらもなかなか裏山に出かけることはできなかった。

それでも先祖から受け継いでいる自宅の裏にある持ち山の「そうじ」は気がかりで、子どもにお金がかからなくなって経済的・時間的な余裕が出た 60 歳代(1980 年代後半)になって山に入るようになった。年金暮らしとなったことと時間的な余裕が出たことで裏山の利用と農作業が一年の流れとなった。

しかし、数 10 年手を入れていなかったマツ山は、雑木がはびこり林床は腐葉土の堆積でふかふかと布団のように柔らかく、うっそうとした状態だった。アカマツ以外の雑木はコナラ、クリ、シデ、クラシバ(ソヨゴ)など、そ

して中低木には多くのヒサカキが生えていた。

マツタケのための「山のそうじ」という場合、長らく地かきというのは知られていず、アカマツ以外の雑木を伐ることを指している。そして、その中でヒサカキは「マツタケにいい」と言われていたために伐らずに残されてきた。正確なことは把握されていないが、マツタケが出るためのちょうど良い日陰となると想像されている。

#### 4. 整備している事例

石川県は能登半島の先端を占める珠洲市。美しい海岸から離れて内陸部に入った東山中町に在住している前智・克子さん夫妻はマツタケが激減してしまった山にはあふれるほどヒサカキがあるために何か有効利用ができないかと考えた。それまで、ヒサカキは自家用に使うのみで外に向けて生産販売できるとは思っていなかったという。しかし、70歳の声聞くようになると外に働きに出て行くことはとても無理だと思う中、山にたくさんあるヒサカキは何かにならないかという思いを知人に語った。するとヒサカキが花卉市場に卸されていることを知りヒサカキが商品になるとを初めて認識する。

前さんの希望はまわりまわって、能登半島でヒサカキを積極的に商品化する話が珠洲市とNPOの連携で検討され「ヒサカキの出荷をしてみないか」という話があらためて前さんにもたらされた。前さん含め、70代前後の方たちの女性メンバーがグループをつくってヒサカキ出荷をしてみることにになった。

この場合、ヒサカキ出荷のために山の整備をするという話ではなく、山にすでに潤沢にあるヒサカキの利用が眼目だった。そのため出荷のハードルはちゃんとした商品としていかに美しく成形するか、が鍵となった。その指導(花屋が指導)が大変厳しく「これなら普通に働いていた方が良かった」という声が出たほどだという。

出荷ヒサカキ(そのまま供え物にできる状態)に求められる要件は以下となる。

全長 約 32～35 cm前後

横幅 約 16～18 cm前後

葉の部分 約 22 cm前後

下枝部分 約 10 cm前後

一束に使用本数 5～10 本程度(あまり本数を増やすと花器に入らない)

形 二等辺三角形で葉は平面に広がる

このように明確な「望ましい形」が決められているため、天然自然に生え

ているヒサカキの枝を採取してこの定型に整えるのは思っていたより時間を要するものだった。特に、芯とする 2 本は全長の長さと同幅が共に満たされていることと適度な葉の量が左右に広がっていることが鍵となるため、それに適する枝を採取することは容易ではない。また、葉には虫食いやカビ、汚れが付着しているものがほとんどで、さっと洗った程度では落ちない汚れが多い。さらに、5~6 月の新芽どきの新しい葉は採取後しなびて枯れるため、これらの新葉もすべて取り除く必要がある。季節的な手間もかかる。

つまり、ヒサカキそのものは大量に山に生えているものの、実際に商品として採取可能な枝となると決して多くはないことが次第にわかっていく。

それでも、町から遠く離れた山中で稼げるという稀少さから 7 人のグループは継続して出荷(月 2 回ペース)を続けて 4 年になる。前さんは平均して一回 100 束ぐらいを出荷している。1 束は 80 円で卸されるが、10 円が手数料で取られるため 70 円が手元に残る。ただし、それらからまた箱代、出荷運搬代などを共同で出資する。

## 5. 整備の仕方と工夫

前さんの山は最初の 2 年ぐらいいは比較的良いヒサカキを採取できたため、これらの成形に今ほどの時間がかからず出荷できた。それは、定年後に時間的・経済的余裕ができた頃に気にかけていた「山のそうじ」をした場所のヒサカキが良好な状態だったからだ。葉がきれいでスッとまっすぐ伸びた枝が多く、芯材となるものが今よりも楽に採取できた。

振り返って考えたとき、そうじの仕方はマツタケの邪魔になると落葉広葉樹を伐採し、それらの伐採木はまとめて一部に置くということをしており、そうして前述のように「マツタケの生育に良いから」とヒサカキを残す、というやり方をしていた。それが結局マツ枯れによってマツタケ自体はより減少してしまったものの、ヒサカキの状態を良くしたことになった。

落葉広葉樹がヒサカキの上に多くある状態のとき、下のヒサカキは汚れ、虫食いが多く、また、枝の葉つきもあまり良くなくふわふわと心もとない形状となってまっすぐ伸びない傾向が見られることが比較するとわかったからだ。

つまり、天然状態で良いヒサカキを採取するには、ヒサカキを覆うような上木はない方がよい。ただし、全面的に日光が当たるよりも、チラチラとした木漏れ日程度が良いようで、その点、主木のアカマツは残し、雑木は伐る、というやり方が最適だったのではないかと前さんは考えている。また、風通しも影響すると考えられている。

## 6. 課題と注意点

天然状態で良いヒサカキが育つ環境の傾向は経験上わかってきたものの、

現状ではこのようにしつらえた山は過去の「山そうじ」の結果だったため、そうじがされていない山のヒサカキから商品採取することが大変手間取るようになっている。

少しずつ山そうじは続けているものの、ヒサカキは枝を採取した後の新しい芽の伸びが良くない。そのため、採取後の木から新たに次々と採取できるというサイクルは現状ではない。指導を受けた際には「いくらでも萌芽するから」と言われて幹の部分から伐採したものが多いが一高さは胸高で伐採—そこからあまり活発な萌芽が見られていない。

根元からの伐採はまだ実施していないが、他所でヒサカキ栽培をしている例では成長が大変遅い様子を見知っているため、全般的に成長が良くないのではないかと推察されている。

## 7. 備考

ヒサカキは一年を通して需要があり、通年で出荷している。特に8月のお盆と年始に向けては出荷量を極力増やしてほしいという希望が出されるが、容易ではない。前さんは100束の出荷には採取・成形あわせて4~5日を要しているが、それによって手元に入る賃金は100束で7000円となっているため、手間と得る賃金の割合から言えば分はかなり割りは良くない。それが、全国に多く生えていながらも国産ではなく輸入が多い背景だろう。

しかし、一方で繰り返し前さんが言っていたのは「山の中でできること」というのが大事な鍵となっていた。安くとも、それは天然自然に生えていたもので何ら設備投資もランニングコストもかかっている。何もせずぶらぶらしているよりも「ちいっとでも」という気持ちが大きい。

また、ヒサカキだけで稼ぐのではなく、春の山菜—フキ、ワラビ、ゼンマイ、ミズブキなど—を春の1カ月半ほど出荷し、秋はきのこ—マツタケは数えるほどになっているが、ヌメリタケ、アミタケを合わせて出荷—そして、収入の主軸は原木栽培しいたけがある。春の山菜とりが始まる前がしいたけの最盛期。

いわばヒサカキはこれら季節ごとの採集・収入をさらに補完する位置で通年を通して「山から採ってきて少しでも収入になる」という位置づけにある。加えて自家用の農業にこれまたささやかながらカボチャの出荷や依頼されて少しのソバ栽培などが前さんのこの数年の働き方だ。

経済性や効率性からだけ見ての収入として考えれば確かに大変割が悪いものの、年間を通してすべて自分の山と畑に働きかけて得られる収入で、体を動かすことで心身のために良く、山はきれいになって、安くとも収入がある、ということの価値を繰り返し話された。子育てで費用のかさむ世代では難しいものの、年金暮らしの世代ならば「昔よりも自分の小遣い増えている」

状況になっている。誰に気がねすることなく、ご先祖さんの残してくれた山のおかげで忙しいと笑う。

実は町に一軒新居をもっているが、「町に行ってもなんもすることなくてつまらんから行きたくない」と言うご夫妻だった。